

使用済み核燃料4年で満杯

高浜原発 六ヶ所遅れなら停止も

高浜原発2号機が再稼働したことで、同原発内から使用済み核燃料を搬出できない場合、関西電力の試算によると、燃料貯蔵プールが今後約4年で満杯になる見通しだ。2024年度上期の完成を目指す青森県六ヶ所村の再処理工場が当面の搬出先となるが、稼働が遅れば高浜原発の運転を停止せざるを得なくなる可能性も出てくる。

使用済み核燃料は関電の県内原発内にたまり続けており、全貯蔵容量の8割以上が既に埋まっている。外部に搬出できない場合、大飯原発が約6年、美浜原発は約7年で満杯になる試算だ。

関西電力の原発に保管されている使用済み核燃料 (単位:体、8月末現在)

原発	現在の保管量	貯蔵容量	管理容量	年平均の発生量	満杯になるまで
美浜1号(廃炉)	231	288	—	—	—
2号(〃)	510	555	—	—	—
3号	432	809	652	33	約6.6年
高浜1号	130	424	267	33	約4.1年
2号	118	424	267	33	
3号	1,345	1,769	1,612	45	
4号	1,514	1,769	1,612	45	
大飯1号(廃炉)	629	704	—	—	約5.8年
2号(〃)	(プール共用)	(プール共用)	—	—	
3号	1,658	2,129	1,936	45	
4号	1,685	2,129	1,936	45	

※満杯になるまではフル稼働した場合。運転中はプールに1炉心分の空きスペースが必要で、貯蔵容量からスペース分を引いた管理容量までしか使用済み核燃料を保管できない。

出を巡り、関電は6月、高浜原発で保管する約200トンをフランスに搬出する計画を示したが、搬出時期は20年代後半としており、先に貯蔵プールが満杯になる

可能性もある。

関電はフランスへの搬出計画について、年末を期限に県と約束する中間貯蔵施設の県外計画地点提示と「同義」と主張。関電の主張を追認した国に県や県会が反発し、再説明を求めて判断を保留している。

8月には山口県上関町で中国電力と関電が共同開発を目指す中間貯蔵施設の建設計画が浮上し、建設に向けた現地調査が始まった。ただ、仮に建設できても中国電力は「十数年はかかる」との見通しを示している。

使用済み核燃料の搬出は現時点で再処理工場の操業開始に頼るしかない。県は国に再説明を求めた4項目の中で、▽政府の問題として再処理工場を早期完成させる▽予定通り稼働しない場合の対応策の提示—を掲げた。杉本達治知事は今月12日の県会一般質問で「国が丁寧に説明する機会を、われわれは待っている」と答弁している。(岩瀬善郎)